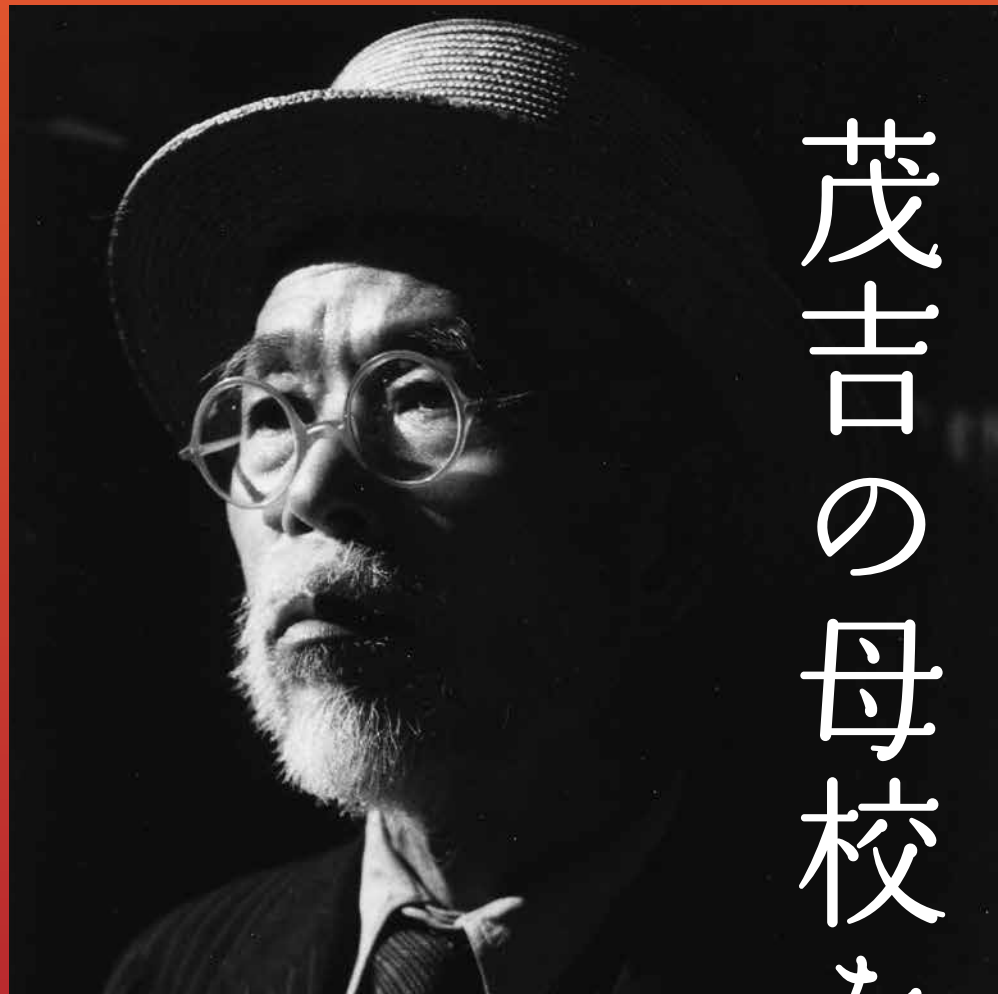


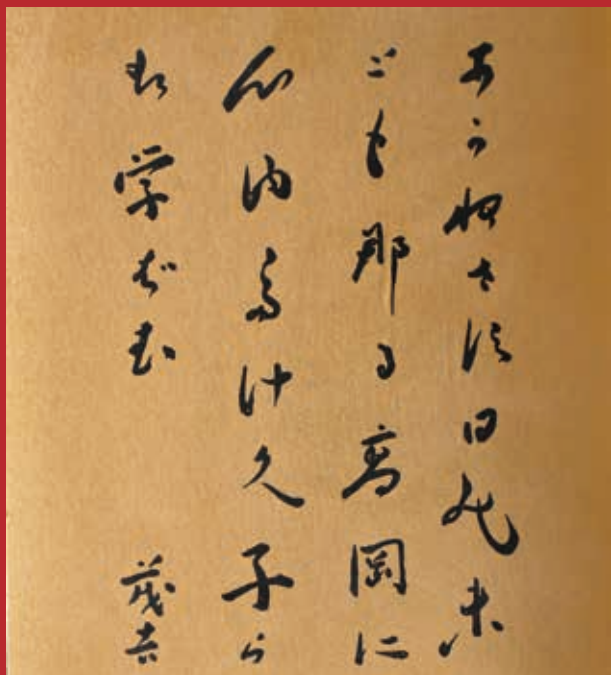
# あかね館



斎藤茂吉(撮影:佐々木勇)

## 茂吉の母校を訪ねる。

山形県堀田第二小学校のために  
あかねさす日のまともなる高岡に  
心ゆたけく子らは学ばむ  
歌集『寒雲』(昭和十二年)



蔵王二小全児童暗唱短歌

さいとうもきち りやくねん ぶ  
斎藤茂吉 略年譜

※年齢はその年の満年齢

| 明治 (めいじ)      |                                                                                                      |
|---------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 15年(1882) 誕生  | 5月14日(戸籍では7月27日)山形県南村山郡金瓶村(現上山市金瓶)の農家守谷家に生れる。父 熊次郎(伝右衛門)・母 いくの三男                                     |
| 21年(1888) 6歳  | 4月 金瓶尋常小学校に入学する。                                                                                     |
| 22年(1889) 7歳  | 金瓶村が9ヶ村合併により堀田村となる。                                                                                  |
| 23年(1890) 8歳  | 4月 小学校合併のため堀田村半郷尋常小学校3学年に移る。                                                                         |
| 25年(1892) 10歳 | 4月 堀田村半郷尋常高等小学校高等科に進学する。<br>9月 上山尋常高等小学校が開校したため、12月に上山尋常高等小学校高等科1年に転校する。                             |
| 29年(1896) 14歳 | 4月 上山尋常高等小学校高等科を首席で卒業する。<br>8月 上京、浅草東三筋町の斎藤紀一宅(浅草医院を開業)に寄宿する。<br>9月 東京府開成尋常中学校第一学年に編入学する。(明治34年3月卒業) |
| 35年(1902) 20歳 | 9月 第一高等学校第三部に入学する。(明治38年7月卒業)                                                                        |
| 38年(1905) 23歳 | 正岡子規遺稿集『竹の里歌』を読んで本格的に作歌を志す。<br>9月 東京帝国大学医科大学に入学する。(明治43年卒業 翌年附属病院に勤務)                                |

| 大正 (たいしょう)    |                                       |
|---------------|---------------------------------------|
| 2年(1913) 31歳  | 10月 第1歌集『赤光』を出版する。(この年、実母いく・伊藤左千夫が死去) |
| 3年(1914) 32歳  | 4月 青山脳病院(東京青山)院長斎藤紀一の次女輝子と結婚する。       |
| 10年(1921) 39歳 | オーストリア・ドイツ留学に向かう(大正14年帰国)             |
| 15年(1926) 44歳 | 5月 歌誌「アララギ」の編集発行人(代表)となる。             |

| 昭和 (しょうわ)     |                                                                                                                  |
|---------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 2年(1927) 45歳  | 4月 養父紀一のあとを継ぎ、世田谷区松原に再建した青山脳病院の院長となる。                                                                            |
| 9年(1934) 52歳  | 8月 蔵王熊野岳山頂に歌碑が建つ。(茂吉が直接歌碑を見たのは昭和14年)                                                                             |
| 12年(1937) 55歳 | 本校で校歌を茂吉に依頼した時、代わりに<br>「あかねさす日のまともなる高岡に 心ゆたけく子らは学ばむ」<br>と書かれた茂吉自筆の色紙が届く。<br>この歌は歌集『寒雲』に「山形県堀田小学校のために」と題し収められている。 |
| 20年(1945) 63歳 | 4月 東京から郷里金瓶の斎藤十右衛門家に疎開する。(8月終戦を迎える)                                                                              |
| 21年(1946) 64歳 | 1月 山形県大石田町の二藤部家の離れ(聴齋書屋)に移る。                                                                                     |
| 22年(1947) 65歳 | 11月 大石田より東京都世田谷区代田に引き上げる。(昭和25年11月新宿区大京町に移る)                                                                     |
| 26年(1951) 69歳 | 11月 文化勲章を受ける。                                                                                                    |
| 28年(1953) 70歳 | 2月25日 新宿区大京町の自宅にて心臓喘息のため死去する。(満70歳9カ月)<br>戒名「赤光院仁誉遊阿阇寂清居士」は生前自ら選ぶ。                                               |

さいとうもきち

斎藤茂吉 (明治15年～昭和28年)



明治25年茂吉10歳の頃



昭和12年、茂吉が「あかねさす」を詠んだ頃



明治28年頃幼少期の茂吉が描いた風絵「桃太郎」

旧堀田村(蔵王村)現山形市立蔵王第二小学校卒業  
明治15年5月14日、山形県南村山郡金瓶村(現在上山市金瓶)に生まれ、昭和28年に70歳で亡くなりました。  
明治37年に発行された正岡子規の遺稿集『竹の里歌』を読んでものすごく感動し、本格的に歌を作り始めます。そして明治39年に伊藤佐千夫のもとで短歌の勉強し、その後「アララギ」の中心歌人として活躍しました。  
また、「心のお医者さん」としても勉強にげみ、オーストリア、ドイツ留学を経て青山脳病院院長の仕事をしなが、全17冊の歌集を発刊して、約17,000首を超える歌を作りました。



しゃっこう  
赤光

歌集『赤光』は大正2年(1913年)10月に発刊された斎藤茂吉の初めての歌集でありながら、芥川龍之介などの著名人から高い評価を受けました。茂吉が日本を代表する歌人として有名になった歌集です。

編集・発行 2023.7.27  
山形市立蔵王第二小学校 教育後援会 会長 山口三千夫  
山形市立蔵王第二小学校 同窓会 会長 大沼 一郎  
創立百周年記念事業実行委員会 委員長 荒井 進  
山形市立蔵王第二小学校 校長 鈴木 章人  
写真提供・協力 公益財団法人斎藤茂吉記念館



斎藤茂吉のおもな歌集(本校蔵書の歌集)

歌誌「アララギ」(昭和28年10月号)

さいとうもきち しょうがい しょうかい かん へいせい  
斎藤茂吉の生涯を紹介する「あかね館」は、平成十二  
ねん がつ ほん こうそうりつひやくしゅう き ねん かい と  
年十一月、本校創立百周年を記念して本校二階の図  
しょかんまえ せつ ち  
書館前に設置されました。

ぼ こう まな こ よ うた  
茂吉が母校に学ぶ子どもたちに寄せた歌

たか おか  
「あかねさす日のまともなる高岡に心ゆたけく子らは  
しょうわ よ  
学ばむ」は昭和十二年に詠まれました。

ぞう さいしよ  
本校がめざす子ども像として、茂吉の歌の最初の三  
も じ づよ  
文字「あかね」をとり、「あかるく」「かしこく」「ねばり強  
く」をかかげています。

よ  
また、本校の子どもたちを「あかねっこ」と呼ぶゆえん  
ともなっています。

# 茂吉の代表作に触れる。

ふりかへるの歌記は現代歌のつかにめしませす。

## ■茂吉の最初の歌集「赤光」の歌

のど赤き 玄鳥ふたつ 屋梁にゐて  
足乳根の母は 死にたまふなり

◇歌集『赤光』（大正二年）「上山市金瓶宝泉寺歌碑」  
落の葉に 丁寧にあつめし 骨くづも

みな骨瓶に 入れしまひけり

◇歌集『赤光』（大正二年）

足乳根の 母に連れられ 川越えし  
田越えしことも ありにけむもの

◇歌集『あらたま』（大正三年）「上山市月岡公園歌碑」

## ■茂吉が小学校近くで歌った作品

ふるさとの 蔵の白かべに 鳴きそめし

蝉も身に沁む 晩夏のひかり（二年暗唱短歌）

◇歌集『あらたま』（大正五年）

もろともに 教の親の みいのちの

ささくいませと 建つる石ぶみ

◇歌集『たかはら』（昭和四年）「蔵王半郷中山五右衛門邸碑」

## ■茂吉の歌碑紹介

大さ河 ドナウの遠き みなもとを

尋めつつぞ来て 谷のゆふぐれ

◇歌集『遍歴』（大正十三年）「ドナウ源泉歌碑」

朝ぐもの あかあかとして たなびける

蔵王の山は 見とも飽かめや

◇歌集『石泉』（昭和六年）「蔵王温泉バスターミナル歌碑」

陸奥を ふたわけざまに 聳えたまふ

蔵王の山の 雲の中に立つ（五年暗唱短歌）

◇歌集『白桃』（昭和九年）「蔵王熊野岳山頂歌碑」

雪消えし のちに蔵王の 太陽が

はぐくみたりし 駒草のはな（一年暗唱短歌）

◇歌集『寒雲』（昭和十四年）「蔵王坊平記念碑」

桜桃の 花しらじらと 咲き群るる

川べをゆけば 母をしどおもふ

◇歌集『霜』（昭和十六年）「上山市フルーツライン歌碑」

山の峰 かたみに低く なりゆきて

笹谷峠は 其處にあるはや（四年暗唱短歌）

◇歌集『霜』（昭和十六年）「蔵王大権現歌碑」

ふた国の 生きのたづきの あひかよふ

この峠路を 愛しむわれは

◇歌集『霜』（昭和十七年）「笹谷峠歌碑」

たましひを 育みますと 聳えたつ

蔵王のやまの 朝雪げむり

◇歌集『小園』（昭和十九年）「蔵王温泉わかまつや旅館歌碑」

あしひきの 山の池なる 白き鯉

われの心は けふは和ぎなむ

◇「短歌拾遺」（昭和二十年）「松尾山観音堂境内歌碑」

蔵王山の かげより白雲の わきのぼる

さまあざやかに けふはれわたる

◇「短歌拾遺」（昭和二十年）「蔵王の朱い大鳥居歌碑」

最上川の 上空にして 残れるは

いまだうつくしき 虹の断片（六年暗唱短歌）

◇歌集『白き山』（昭和二十一年）「大石田町今宿虹ヶ丘歌碑」

最上川 逆白波の たつまで

ふぶくゆふべと なりにけるかも

◇歌集『白き山』（昭和二十一年）「大石田町乗船寺歌碑」

万国の 人來り見よ 雲はるる

蔵王の山の その全けきを

◇歌集『つきかげ』（昭和二十五年）「蔵王上の台」

ひむがしの 蔵王の山は 見つれども

きのふもけふも 雲さだめなき（三年暗唱短歌）

◇歌集『石泉』（昭和六年）「蔵王温泉おおみや旅館歌碑」

# 茂吉の生涯を振り返る。



大正12年 ドイツ(ベルリン)にて  
右から茂吉、妻輝子、  
友人前田茂三郎(蔵王一小卒・ドイツ大使書記官)



大正11年 ウィーン大学神経学研究所で  
顕微鏡を覗く茂吉



明治38年、正岡子規の遺稿集『竹の里歌』を読んで  
感銘を受け、本格的に作歌を志す



第一高等学校卒業写真 明治38年5月  
前より3列目左が茂吉、その下の列  
左から2人目が英語を教えた夏目漱石



実父 守谷熊次郎と茂吉  
明治25年頃、茂吉10歳



版画 蔵王山と大鳥居と蔵王二小  
※茂吉の作品ではありません



茂吉 文化勲章受章記念  
昭和26年11月



茂吉 大石田最上川 のほとりにて 撮影:佐々木勇  
昭和22年8月14日



茂吉 大石田にて門人と  
左から板垣家子夫、茂吉、結城袁草果 昭和22年6月20日



蔵王熊野岳山頂に歌碑が昭和9年に建てられる  
茂吉が建てることを認めた唯一の歌碑  
茂吉が直接歌碑を見たのは昭和14年7月8日